ずいそう

未来を予見した50年前の音楽



岩本英司

ちょうど50年前に世に出た音楽が，今も私たちの耳を楽しませてくれています。1972年12月に解散したロックバンド，はっぴいえんどのメンバーであった大滝詠一氏の「NIAGRA MOON」，細野晴臣氏の「TROPICAL DANDY」，鈴木茂氏の「BAND WAGON」，そして大滝氏が主宰したレーベル「ナイアガラ」の第1弾となったシュガー・ベイブの「SONGS」。いずれのアルバムも発売は1975年です。50年を経て音楽を生み出す技術は，格段の進歩を遂げています。それでも半世紀前のこれら音楽が今なお鑑賞に堪え魅了し続けているのはなぜでしょうか―。昭和100年，戦後80年という節目の今年。テレビや新聞，雑誌でも「昭和」を振り返る企画が数多く見られます。本欄では，時計の針を戻して，未来を予見した50年前の音楽について個人的な見解も交えながら考える機会としたいと思いますので，少々お付き合い下さい。

◆土曜夜のイメージが変わる

1980年代にフジテレビ系列で土曜日の夜に放映されたバラエティー番組「俺たちひょうきん族」の記憶は今も鮮明に残っています。漫才ブームの波に乗って始まったものの，PTA団体からは「子どもに見せたくない番組」というレッテルを貼られていたそうです。それでも1960年代後半に生まれ，中学生になりたてだった私にとっては，少し大人になったような気分を味わえる番組でした。その理由は，エンディングに流れるテーマ曲「DOWN TOWN」にあります。EPOが歌う「ダウンタウンへ繰り出そう～♪」という軽快なメロディー。これを聴くと土曜日の夜がそれまでとは違う何かキラキラするような素敵な時間帯に感じられたものです。

「DOWN TOWN」は元々，山下達郎氏，大貫妙子氏を擁したシュガー・ベイブのデビューアルバム「SONGS」に収められた1曲です。当時，このアルバムは大して売れませんでした。それでも「洋学マニアな空気を邦楽的に展開する」（山下氏）というコンセプトで作り出す彼らの音楽の信奉者は少なからずいたようです。山下氏らと同世代で建設会社に勤める傍ら「おやじバンド」で活躍していた方に以前取材したことがありました。曰く「彼らのことが大好きで学生時代に音楽にのめり込んだのですよ」。そんな言葉もうなずけると，取材をしながら思ったものです。

現役シンガーとして今も活躍する山下氏は前出の「DOWN TOWN」や「パレード」「雨は手のひらにいっぱい」，大貫氏は「蜃気楼の街」「風の世界」「いつも通り」と，それぞれ作り出す楽曲のタイプが異なりますが，それがバンドの個性にもなっていましたし，2人がデュエットした「すてきなメロディー」でも彼らならではの音楽を紡いでいました。

◆自主制作盤がデビューのきっかけ

ナイアガラレーベルからデビューしたのは，山下氏が十代最後に音楽仲間と作った自主制作盤が大滝氏の耳に届き，1973年に行われたはっぴいえんどの解散コンサートで山下氏や大貫氏らをコーラス隊に起用したのがきっかけだそうです。諸々の事情で商業的な成功には結びつかなかったものの，山下氏，大貫氏が音楽界で活躍する最初のきっかけを大滝氏が用意したという事実を聞くだけでも，音楽ファンにはうれしい話です。

レーベルを主宰する大滝氏は，変名（笛吹銅次）を使って録音のエンジニアも務めています。そうした経緯もあってか思い入れが深く，「第1弾がこのアルバムであったことはこのレーベルにとっても私にとっても最高に幸せなことでした」と述懐しています。レーベル第2弾が自身の「NIAGRA MOON」で，自宅を改造したスタジオで録音しています。さまざまなリズムを使って作り出した楽しい作品を通じて，「大きい滝＝ナイアガラ」のごとく，幅広い音楽を届けたいというレーベルの志を示しました。

はっぴいえんどで大滝氏との二枚看板として活動した細野氏の「TOROPICAL DANDY」は後にトロピカル3部作と呼ばれる「泰安洋行」「はらいそ」へと続く一連の作品の初弾です。アメリカを志向していたバンド時代から脱して，世界のさまざまな音楽をごった煮したような作品づくりは，その後イエローマジックオーケストラとして世界を席巻する礎にもなっていきます。

鈴木氏は，はっぴいえんど結成時にギタリストとして大きな役割を果たしていましたが，途中から楽曲づくりにも力を注ぎます。最初に発表した「花いちもんめ」では，ドラマーであった松本隆氏が作った歌詞「紙芝居が店をたたんだあとの狭い路地裏にはヒーローでいっぱい～♪」をメロディーに乗せて独特の世界観を表しました。解散が決まっていた最後のアルバムで米国録音を経験したことが大きな出来事となり，「BAND WAGON」では単身渡米して，あちらのミュージシャンを起用した録音を挙行。ギターで始まる1曲目の「砂の女」ののっけから，本場米国の迫力あるサウンドを日本に届けてくれました。

はっぴいえんどの活動期間は1969年から1972年とわずか3年ではありましたが，そこから派生する形で生まれた1975年発売のアルバムは今年に入り，それぞれ違う形で50周年記念盤として再発され，話題となりました（**写真**―1）。当時は商業的に成功せずとも，今もって若い人たちの興味も惹きつけていることには，当のご本人たちも当惑しているようです。2013年12月30日に65歳で急死した大滝氏以外，今も現役で活動することも大きな理由でしょうが，半世紀を経ても鑑賞に堪えうるだけの「未来」を予見していたものであったのではないかと勝手ながら思うところです。



写真―1 「SONGS」50周年記念盤

◆未完の「アメリカン・ポップス伝」

近現代の邦楽・洋楽の研究家としても知られた大滝氏は生前，NHK-FM放送の企画で「アメリカン・ポップス伝」というシリーズ番組を2012年から2013年まで放送しました。自身の原点でもあるエルヴィス・プレスリーのデビュー前後から始まり，1960年代前半までのアメリカン・ポップスの変遷を4期にわたって解説するものでした。シリーズ5期では，1960年代の素晴らしいアメリカン・ポップスの数々を紹介いただけると多くのファンが期待する中で悲報が届けられました。ご自身も4期最後の放送で「いよいよパート5では，本格的に60年代ポップスへと突入していきます。それではまた次回をお楽しみに」と述べていました。これが未完となってしまったことは，本当に残念でなりません。

本欄への寄稿に当たり，学生時代から繰り返し読んできた愛読書「はっぴいえんど伝説」（文庫版・シンコーミュージック刊，萩原健太著）を参考にしていることを最後に報告いたします。

――いわもと・えいじ　日刊建設工業新聞社　事業本部
取締役待遇企画・制作局長――